

# 南アフリカ戦争とイギリスの作家たち

土 屋 結 城

## I. 本国から離れて

19世紀にイギリスが経験した戦争は、すべて本国を離れたところでの戦争であり、その多くは植民地を拡大するため、あるいは植民地の内乱を押さえ込むための戦争であった。本稿では、それらの戦争の中でも1899年に勃発した南アフリカ戦争を取り上げ、本国を離れた場所で展開される戦争に対して作家たちがどのように考えたか、感じたかを考察することを目的とする。<sup>1</sup>

まず、南アフリカ戦争開始時からこの戦争に関心を寄せたThomas Hardyを取り上げる。ハーディは兵団が南アフリカに出立する際にはサウザンプトンまで自転車で出かけ、その出立を見送ったという記録が残っている。ハーディが南アフリカ戦争を題材にした詩は“War Poems”と題され*Poems of Past and Present*に収められた。これらの詩はKathryn R. KingとWilliam W. Morganの言葉によればハーディの“first significant public poems”(71)である一方で、ハーディ自身がこれらの詩について“not a single one is Jingo or Imperial”(Letters 2: 277)と述べるように、熱狂的な愛国心に満ちた作品とは一線を画するものである。

ハーディのこの“War Poems”に一貫して見られる態度が、“The Going of the Battery”、“At the War Office, London”、“A Wife in London”、“Song of the Soldiers’ Wives and Sweethearts”に描かれるような本国に残された者たちへの憐憫の情である。中でも“At the War Office, London”は“Affixing the Lists of Killed and Wounded: December 1899”という前書きがつけられ、死傷者のリストを見る妻たちを見つめる視点で描かれている。

... at that censured time no heart was rent  
 Or feature blanched of parent, wife, or daughter  
 By hourly posted sheets of scheduled slaughter;  
 Death waited Nature's wont; Peace smiled unshent  
 From Ind to Occident. (*Poems* 90)

さらにその視点に加えられるのが、戦争の大義に関する疑問である。先にも言及した見送りの経験が反映されている“Embarcation”を見てみたい。この詩には“Southampton Docks: October 1899”という前書きがついており、語り手は、かつてサウザンプトンからブリテン島に上陸したであろうウェスパシアヌスのローマ軍団やここから出航したヘンリー 5世の軍勢に思いを馳せ、以下のように述べる。

... as each host draws out upon the sea  
 Beyond which lies the tragical To-be,  
 None dubious of the cause, none murmuring,  
  
 Wives, sisters, parents, wave white hands and smile,  
 As if they knew not that they weep the while. (*Poems* 56)

ここで焦点があてられているのは兵士たちの“Wives, sisters, parents”の姿であり、“War Poems”の他の詩にも見られる、本国に残される家族への憐憫の眼差しが共有されている。

この詩についてJ. O. Baileyは以下のように指摘している。“That Hardy parallels the South African war with the invasions of Vespasian and Cerdic indicates that he was dubious of the cause and perhaps thought the men should have murmured.”(Bailey 116) これらの過去の戦争との比較についてはTricia Lootensも以下のように指摘している。

England's own shore thus stands as a reminder not only of Roman and Saxon invasions but also of 'Convincing triumphs' that led England to ultimate defeat . . . . To embark on a war is merely to 'argue in the selfsame bloody mode' that has betrayed centuries of Britons and their opponents alike; and as succeeding poems emphasize, patriotic song is part of that mode (Lootens 275).

これらの研究において指摘されているように、南アフリカ戦争への出征がウェスパシアヌスやセルディックの行為と重ねられているのは明白だが、ハーディがそれらの戦争の大義も疑っていたかどうかについては留保すべきであろう。<sup>2</sup>

しかし、南アフリカ戦争の大義に疑問が投げかけられていることは確かである。ここで、ハーディが抱いた戦争の大義への疑問についてさらに考察してみたい。そもそも南アフリカ戦争は白人対白人の戦いである上に、開戦直後にレディスマス、マフェキング、キンバリーを包囲されたためイギリス軍は数週間に及ぶ籠城を余儀なくされ、戦争が長引くことが決定的になった。John Peckは南アフリカ戦争をめぐる言説の分析の中で“A desire to accommodate the war within old frames (the common characterisation of the conflict as ‘the last of the gentlemen’s wars’ attempts to make the war familiar and manageable) has to be set against an awareness that the narrative is falling apart.” (167) と述べ、さらに続けて “As the war dragged on, the idea of ‘the last of the gentlemen’s wars’ seems more and more like wishful thinking, a desire to accommodate a new conflict within an old interpretative frame.” (173) と述べている。つまり戦争が長引くにつれ、イギリスでもこの戦争を疑問視する声が挙げられるようになったということである。

一方、ハーディは開始直後からこの戦争に対して批判的であった。ハーディの批判を検討する上で、ナポレオン戦争を題材にして描いた“The Alarm”と比較してみたい。この作品は、“In Memory of One of the Writer’s Family Who Was a Volunteer during the War with Napoleon”という前書きがつけられている通り、ハーディの祖父が実際に経験したことを題材にしてい

る。フランス革命の後に権力を握ったナポレオンがイギリスに攻め込んでくるという危機感を背景にしており、ナポレオン上陸を知らせる篝火が燃えているのを見て、海岸に向かう男性の心情が描写されている。

As for Buonaparte, forget him;  
 He's not like to land! But let him,  
 Those strike with aim who strike for wives and sons!  
 .....  
 O Lord, direct me! . . .  
 Doth Duty now expect me  
 To march a-coast, or guard my weak ones near? (*Poems* 37-8)

“Those strike with aim who strike for wives and sons!” という表現から、この男性たちの戦いの目的は明らかである。彼らは家族を守るために戦うのである。しかしこの男性はナポレオン上陸の知らせを聞き、妊娠中の妻を置いていかなければならなくなったため葛藤する。ナポレオンの上陸を防ぐため、つまり国を守るために海岸に行くべきか、家に残って妻を守るべきか迷うのである。国を守るのは家族を守るためであるはずなのに、このときは国を守るために家族を守れなくなるという矛盾に直面したためにこのような葛藤が生じたのである。

この兵士像を念頭に置いて“Embarcation”を読むと、なぜ“None dubious of the cause, None murmuring”と非難めいて書かれているのかが理解できよう。南アフリカ戦争は、白人同士の争いでありその大義に疑義が挟まれる余地がある上に、本来ならば家にいて守るべき家族を置いて出発しなければならないのだから、ますますそれが正当な目的なのかどうか疑わしく思えてくるのである。

一方、同じ南アフリカ戦争を題材にし、さらにこの“Embarcation”を始めとするハーディの“War Poems”と共通の題材を選びながら、まったく異なる調子で描かれた詩がある。Rudyard Kiplingの“The Absent-Minded

Beggar”である。この詩は前書きに“For the Fund for the Benefit of Soldiers’ Wives and Children, South African War”とあるように、兵士の未亡人や孤児のための募金を集める目的で書かれ、*Daily Mail*に掲載された後、アーサー・サリヴァンの曲がつけられ、ミュージック・ホールで人口に膾炙した。募金は数ヶ月で250,000ポンドにも上ったと言われている。

タイトルの“the absent-minded beggar”とは詩の中でTammyと呼ばれるイギリス兵士のことを指している。<sup>3</sup> 彼は国に仕えるため出征するが、後に残す家族のことにまで考えが及ばない、つまり“absent-minded”である。

he heard his country call,  
.....

He chucked his job and joined it – so the job before us all  
Is to help the home that Tammy’s left behind him!  
.....

Let us manage so as later, we can look him in the face,  
And tell him . . .

That, while he saved the Empire, his employer saved his place,  
And his mates (that’s you and me) looked out for her.  
.....

We’ll help the homes that Tammy left behind him! (*Early Verse* 207-8)

この詩では、兵士は家族を本国に残していかなければならない、しかしそれは彼の務めなのだから、「私たち」、すなわち語り手を始めとするイギリスに残るものたちはその家族を守ろうと声高に歌っている。

募金目当てで書かれた詩であり、この詩の調子がキプリングの意図であると短絡的に捉えることはできないが、この詩の中では、家族を置いて出征するのが本当に国を守ることになるのかといった疑問は見られない。兵士が帝国を守っている間、「私たち」が家族を守る、そうすべきであると述べており、帝国を守る任務に就いている間、家族を守ることができないと

というような葛藤を兵士に抱かせないようにしているとも言える。まさに George Orwell 呼ぶところの “a jingo imperialist”(184) たるキプリングのイメージと合致する調子の詩である。

## II. 戦争と開放

先にも述べたように “The Absent-Minded Beggar” は、jingoistic な詩として大衆の愛国者精神をくすぐったからこそ多大な額の募金を集めるのに成功したのだが、しかし、この詩を読み解くと、必ずしも愛国的であるだけではないことが見えてくる。そもそも、キプリング自身がこの詩について “were it not suicide he [Kipling] would have shot the man who wrote it.” (Lootens 269) と述べたとの記録があるように、彼にとっても問題含みの詩であったようである。

実際、キプリングは単なる戦争礼賛者ではないということはつとに指摘されている (Bradshaw 83, Lootens 270)。“The Absent-Minded Beggar” においては、上述したように一般的なイギリス兵士を支持し、それゆえに愛国的に響くにも関わらず、イギリス国民への批判を含んでいる。この詩の第1スタンザを検討してみたい。

When you've sung 'God Save the Queen'  
 When you've finished killing Kruger with your mouth,  
 Will you kindly drop a shilling in my little tambourine  
 For a gentleman in khaki ordered South? (*Early Verse* 206)

Daniel Karlinはこの第1スタンザの “killing Kruger with your mouth” の表現にイギリス国民への非難が込められていると指摘している (Karlin 60)。つまり “England as a nation struck Kipling as unprepared, and indeed unfit, for war.” であり、“the civilians who are aping military valour are challenged to put their money where their mouth is.” (Karlin 60) なのである。イギリスが十分に戦争

の準備ができていなかったとの批判は“Recessional”にも見られる。先に考察したようにハーディは、大義が明らかではないとして南アフリカ戦争を批判したが、キプリングはイギリスが制圧に手間取ったことから批判を展開しているのである。

さらにこのようなイギリス批判が明らかに著されている作品として“Service Songs”と題された一連の詩群に収められている“Chant-Pagan”を挙げることができよう。

Me that ‘ave been what I’ve been —

.....

‘Ow can I ever take on

With awful old England again,

An’ ‘ouses both sides of the street,

And ‘edges two sides of the lane,

And the parson an’ gentry between,

An’ touchin’ my ‘at when we meet —

Me that ‘ave been what I’ve been?

.....

Three sides of a ninety-mile square,

Over valleys as big as a shire —

“Are ye there? Are ye there? Are ye there?”

An’ then the blind drum of our fire . . .

An’ I’m rollin’ ‘is lawns for the Squire,

Me!

.....

I will arise an’ get ‘ence —

I will trek South and make sure

If it’s only my fancy or not

That the sunshine of England is pale,  
 And the breezes of England are stale,  
 . . . . .  
 An' a Dutchman I've fought 'oo might give  
 Me a job where I ever inclined  
 To look in an' offsaddle an' live  
 Where there's neither a road nor a tree —  
 But only my Maker an' me,  
 An I think it will kill me or cure,  
 So I think I will go there an' see.  
 Me!

この詩の語り手は、南アフリカから戻ってきた兵士である。彼にとって今やイギリスは“awful old”に感じられる。このような認識を抱くに至った理由の一つがKarlínの指摘にあるように南アフリカの開放的な景色である。“The sublime is here pressed into service against the servility of ‘awful old England.’”(61) そして南アフリカの開放的な風景とイギリスの窮屈な景色が対比されている。

The man who has risen to the height of ‘Kopje on top’ sinks back in the social scale . . . ‘three sides of a ninety mile square’ have shrunk to those sharp-edged ‘edges of both sides of the lane’. ‘Both sides’ plays against ‘three sides’; England’s boundaries close in on you, while in South Africa vistas are possible. (Karlín 61)

さらに以下のような指摘もある。“Kipling’s speaker strikes at the heart of English pastoralism: he can no longer bear a native land in which ‘something’ seems to have ‘gone small.’”(Lootens 272)

この語り手がイギリスで窮屈に感じているものは風景だけではない。



第1スタンザの “the parson an’ gentry between, / An’ touchin’ my ‘at when we meet” から読み取れることだが、この語り手は現在はsquireのもとで芝の手入れをしており、parsonやgentryに会うと帽子を触る、つまり挨拶をしている。用いられている英語からこの語り手が労働者階級に属する身分であることは明らかであり、彼がsquireに仕え、parsonやgentryに挨拶するのは当然のことである。しかし、彼は戦争時は勲章を受けたほどで、南アフリカでは相応の活躍をしたことが窺える。そして南アフリカには道も木もなく、創造主と自分しかいないと述べる。この表現を換言すれば、南アフリカでは土地が道路や木によって区切られていないため、squireやgentryといった存在に象徴されるような土地所有に基づく階級制度は存在せず、創造主と自分しかいないためparsonが入り込む余地はないということである。彼はたとえ戦時中は敵だった “Dutchman” から職を得ることになろうとも、そのようなアフリカの地へ戻りたいと語るのである。

このように読むと本国を離れた場所での戦争のいま一つの側面が見えてくる。それは既存のしがらみからの解放という側面である。戦争のこの側面に関して、クリミア戦争に従軍した夫に付き添って現地まで行ったMrs Duberlyの手紙が示唆するところが多い。彼女は妹にあてた手紙で戦争下での生活は苛酷であることに触れた後、以下のように述べている。“Yet it is a jolly, jolly life. Hard enough but very jolly. You can go where you like, do what you like, say what you like and have such heaps of friends.” (131) そして現在のこのような自由な状態から本国に戻った後のことを不安げに語る。

(Whenever I say my prayers I think God I have no children – at any rate no daughters – for this world is no place for women – at least for ladies – it is only fit for men – and women who have no self respect.) I shall be a sort of Bashi-Basouk when I get home – defiant of all laws conventional or fashionable –.  
(137)

この引用部分で述べられている “laws fashionable” に関連し、帰国した後

の生活について以下のような不安を吐露している。

I could not live at home. I should suffocate. You may say this is all bosh but I assure you it is the truth. I dread going back. Fancy coming from being the only woman back into all the artificial muslin rags, conventionalities and slanders – the Fashions and the heart-grindings of English sociality – after being out here on a fresh horse, free as air, to come & go, & do what you please . . . (150; emphasis original)

ここで述べられているように、デューバーリー夫人は戦場で馬に乗ったりし、滞在が進むとズボンをはいたりした。このようなふるまいゆえか日記が出版された折には、*Punch* 紙上で “Lady Fire-Eater” と呼ばれその日記についても “Decidedly, there is nothing like gunpowder for preserving the purity of the female mind!” (qtd. in Kelly xi-xli) と揶揄された。彼女自身も “she confessed later that she was driven mad by the lies that were told of her” (Kelly xxi) とあるように嘲笑的となることに苦しめられたが、この手紙からは、本国では味わえない開放感を味わっていることが読み取れる。日記を編集した Christine Kelly はこの点について以下のように解説している。“for a brief time she experienced an independence that few Victorian women ever achieved. Despite the hard life and the tragedies around her, which upset her deeply, she revelled in the freedom she had found . . .” (Kelly xxi)

キプリングの “Chant-Pagan” の語り手やデューバーリー夫人の感じた開放感は、本国から離れた状態であることに加えて、戦時であったのが大きな要因である。戦争という異常事態だからこそ、女性がズボンをはいたり馬に乗ったりしても許されるのである。さらにこの二人は本国から離れたところの戦争に参加したので、二重の意味でしがらみから自由である。一つは、場所が離れているがゆえの自由、いま一つは戦争という異常時だからこそ自由である。この側面に注目すると、まさに戦争は “catastrophe” という言葉が当てはまる状況である。*Oxford English Dictionary* には

“catastrophe” の意味として “An event producing a subversion of the order or system of things” という説明が記されている。戦争とはここに記されている「既存の秩序を転覆させるような出来事」を生み出すとも言えるだろう。

## 注

本稿は平成24年度実践英文学会シンポジウム「カタストロフィとその後—Catastrophe and Its Aftermath」にて口頭発表した原稿「Home and Away—南アフリカ戦争とイギリスの作家たち」を加筆、訂正したものである。

- 1 本稿で取り上げる南アフリカ戦争とは1899年から1902年にかけて行われた第2次南アフリカ戦争のことである。
- 2 ハーディはローマ時代の遺跡に多大な関心を寄せていた上、サクソン王国時代の呼称ウェセックスを用いるなど、それらの時代のイギリス史に深い関心を抱いていた。この事実に鑑みると、ウェスパシアヌスやセルディックへの言及が非難するためであるとは一概に結論づけられるものではない。
- 3 一般的なイギリス兵を指す名Tommy Atkinsの愛称である。

## 参考文献

- Bailey, J. O. *The Poetry of Thomas Hardy: A Handbook and Commentary*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 1972. Print.
- Bradshaw, David. “Kipling and War.” *The Cambridge Companion to Rudyard Kipling*. Ed. Howard J. Booth. Cambridge: Cambridge UP, 2011. 80-94. Print.
- “Catastrophe.” Def. 3. *The Oxford English Dictionary*. 2nd. ed. 1989. Print.
- Duberly, Frances Isabella. *Mrs Duberly’s War: Journal and Letters from the Crimea, 1854-6*. Ed. Christine Kelly. Oxford: Oxford UP, 2007. Print.
- Hardy, Thomas. *The Collected Letters of Thomas Hardy*. Ed. Richard Little Purdy and Michael Millgate. 7 vols. Oxford: Clarendon, 1978-88. Print.
- . *The Life and Work of Thomas Hardy*. Ed. Michael Millgate. London: Macmillan, 1989. Print.
- . *Thomas Hardy: The Complete Poems*. Ed. James Gibson. Basingstoke: Palgrave, 2001.

Print.

Karlin, Daniel. "From Dark Defile to Gethsemane: Rudyard Kipling's War Poetry." *The Oxford Handbook of British and Irish War Poetry*. Ed. Tim Kendall. Oxford: Oxford UP, 2007. 51-69. Print.

Kelly, Christine. Editor's Introduction. *Mrs Duberly's War: Journal and Letters from the Crimea, 1854-6*. By Frances Isabella Duberly. Oxford: Oxford UP, 2007. Print.

King, Kathryn R., William W. Morgan. "Hardy and the Boer War: The Public Poet in Spite of Himself." *Victorian Poetry* 17 (1979): 66-83. Print.

Kipling, Rudyard. *The Collected Works of Rudyard Kipling: Early Verse, The Muse Among the Motors, Miscellaneous*. New York: AMS P, 1971. Print.

---. *The Collected Works of Rudyard Kipling: The Seven Seas, The Five Nations, The Years Between*. New York: AMS P, 1970. Print.

Lootens, Tricia. "Victorian Poetry and Patriotism." *The Cambridge Companion to Poetry*. Ed. Joseph Bristow. Cambridge: Cambridge UP, 2000. 255-279. Print.

Orwell, George. "Rudyard Kipling." *The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell*. Vol. II. *My Country Right or Left: 1940-1943*. Ed. Sonia Orwell and Ian Angus. London: Secker and Warburg, 1968. 184-97. Print.

Peck, John. *War, the Army and Victorian Literature*. London: Macmillan, 1998. Print.

Reed, John R. "The Victorians and War." *The Cambridge Companion to War Writing*. Ed. Kate McLoughlin. Cambridge: Cambridge UP, 2009. 135-47. Print.

Smith, M. Van Wyk. *Drummer Hodge: The Poetry of the Anglo-Boer War (1899-1902)*. Oxford: Clarendon, 1978. Print.

ハーディ、トマス『トマス・ハーディ全集 詩集I』内田能嗣、押本年眞、森松健介 他訳、大阪教育図書、2011年。

前川一郎『イギリス帝国と南アフリカ：南アフリカ連邦の形成1899～1912』ミネルヴァ書房、2006年。